武器

圭頭大刀

金銅装の圭頭大刀で，柄頭（つかがしら），鍔（つば），柄縁金具（つかぶちかなぐ），鎺（はばき），足金物（あしかなもの），鞘尻金具（さやじりかなぐ），責金具（せめかなぐ）に金銅が用いられている。出土状態は佩裏（はきうら）側を上にしていたが，佩表（はきおもて）側の方が遺存状況は良い。

柄頭の遺存状況は悪く，金銅板は佩表の片面を残すのみである。木芯部分には漆が残存していることから，木芯に漆を塗った後，金銅板を張ったものと考えられる。片側には圭頭をうかがわせる屈曲が認められる。長さは6.5cm，最大幅4.2cmである。断面形は遺存状況から推定するとやや尖り気味の倒卵形をなす。この柄頭は柄木にはめ込まれた後，左右から打ち込んだ鵐目（しとどめ）状金具と二重の縁金具で柄木に固定されていたと思われる。佩表側の鵐目状金具は，外径1.0cm，内径0.6cm，長さ1.0cm，厚さ0.1cmである。また，佩裏側にも鵐目状金具の一部が残存しており，径はおよそ1.0cmと思われる。柄縁金具はふたつとも遺存状況が悪く，佩表側しか残存していない。柄頭側のものは長さ4.5cm，幅0.6cm，厚さ0.2cm，柄側のものは長さ4.1cm，幅0.4cm，厚さ0.2cmでともに板状の金銅を輪にしたものである。断面形は遺存状況から倒卵形と推定される。

柄頭と鍔の間に金属の装具を用いた痕跡はなく，茎を包む木質が遺存しているだけである。一部木質の方向と直交する有機質の痕跡がみられることから，柄木の上から糸で巻いていたものと思われる。また，柄頭の縁金具と柄縁金具の形態・大きさが異なることから，柄は柄頭から鍔に向かって絞り込まれるものであったと思われる。柄頭は柄の部分から離れて出土したため，正確にはどこに位置するかはわからないが，いずれにしろ，柄間の長さは短く，実用的に使われたものではないものと思われる。

鍔は板鍔で，無窓である。一部湾曲しているが長径6.5cm，短径4.5cm，厚さ0.2cmで，平面形は倒卵形である。端には幅0.3cmの覆輪が施されている。鎺は幅1.4cm，厚さ0.2cmの金銅薄板をまるめたもので，佩表側の背側寄りに合わせ目がある。断面形は倒卵形をなし，長径3.1cm，短径1.9cmである。

刀身は錆による腐食が激しく板状の剥離が進み，また鞘の木質が残存しているため正確な形態はわかりにくいが，X線写真によりおおよそについては理解できる。切先はフクラ切先で，平造りの刀身である。関は鎺によってかくれているが刀身および茎部の幅から推定すると両関であると思われる。刀身の全長は80.0cm，重さ902gである。刀部は長さ69.9cm，幅は関寄りで2.8cm，中央で2.3cm（残存），切先寄りで2.6cm，厚さは概ね0.6cm（推定）である。断面形はふくらみをもつ逆二等辺三角形をなす。茎部は長さ10.1cm，幅2.0cm，厚さ0.4cmで断面形は長方形である。また，刀身の中程に木質が多く残存していることから，鞘中金具のあった可能性も考えられる。

足金物は2点出土しているが，装着されていた正確な位置はわからない。足金物は金銅板の中央を溝状に盛り上げて丸めた責金物に，別造りの帯執環（おびとりかん）を取り付けたものである。帯執環は上端よりやや佩裏側に位置し，正面からみると「8」字形になる。1点は1/2ほど残存しており，長